令和８年度 第１回 北海道立函館美術館協議会会議録

１　日　　時　　令和８年 10 月 28 日（水）　10:00～11:15
２　会　　場　　北海道立函館美術館　講堂
３　出席委員　　坪谷会長、元木副会長、佐々木委員、桜花委員、梨木委員、吉田委員、
澤田委員、神林委員
（欠席委員：石岡委員、土生委員、田中委員、髙村委員）
４　傍 聴 者　　報道関係者１名（北海道新聞社）
５　議　　事

(1) 報告事項

ア　令和７年度事業実施状況について

事 務 局：「令和７年度（2025 年度）事業の実施状況について」に基づき説明。
委員からの意見等なし

イ　令和７年度道立美術館評価について

事 務 局：「令和７年度（2025 年度）道立美術館評価について」に基づき説明。
委員からの意見等なし

(2) 協議事項

令和８年度事業の運営計画について

事 務 局：「令和８年度（2026 年度）事業の運営計画について」に基づき説明。
委員からの意見等なし

(3) その他（全体を通しての意見）

委　　員：　全体を通して、令和７年度、８年度それぞれ、来館者数のみを重視するという訳にはいかないが、「山下清展」や「チームラボ展」のような集客数を引き上げる、目玉となる展覧会があると違うと思っており、令和９年度はどうするのか考えなければならないと思っています。
　色々な角度から楽しんでもらえる工夫がされているので、足を運んでもらえるような連携コラボやコンサートを引き続き考えてほしい。

委　　員：　以前から課題になっていた、若者層の方たちに美術館に来ていただければということを私も感じており、特に高校生に来てもらう必要があると思いますが、そうした 10 代の方たちに来ていただくような企画があればいいと思っていました。
　たまたまですが、昨年、青森県立美術館に行く機会があり、その時に丁度ガンダム展を開催しており、ガンダムや色々なアニメのセル画などを展示し、同時並行的に、ホラー漫画を描く作家の原画展をやっており、常設展には大人の方が大勢いらっしゃったのですが、特別展には、若者がたくさんおられ

て、やはり若者に訴求するものがあると楽しいのではないかと思いました。
そうした、アニメや漫画、ゲームのコンテンツを使用するというのは、なかなかお金のかかる問題でもありますし、難しいかもしれませんが、今後のチャレンジの一つとして検討してもよいのではないかと思っています。

委　　員：　観覧している年齢層が高かったからかもしれませんが、これまでの展覧会において、何人かの観覧者から、「キャプションのポイントが見にくいので、もう少し大きくしてほしい」というのと、情報の発信について、特に「日本画」とか「書」に関しては、「内容が簡単に入ってくるような内容をキャプションの中に簡潔にまとめていただけると、より深く見ることができるのではないか」という声を聞きました。
それと、「チームラボ展」のように、参加型・体験型の展覧会を開催することで、自分も参加し楽しむことができる。それで、自分も行きたい、子どもを連れて行きたいと、リピーターになってくれるということがあると思います。
高校生の来場者数が少ないことが、毎年課題になっていると思いますが、学校との連携には、条件的に色々難しさがあります。その中の、やはり教育普及活動で、美術館で実施しているワークショップや教育普及活動の全部が、その時で終わる単発のものが多いと思います。複数回来場できるような、例えば、アートスクール、ミュージアムスクールのような感じで、２、３回でも、特に学校の行事と授業等に差し支えない範囲で、土日とかで時間を短く限定して複数回行う。そうした連続的なワークショップをお考えにならないのかと思いました。
それから、地域との連携では、ボランティアの育成です。ボランティアというのは、もしかすると職員の負担が大きくなってしまうというマイナス点もありますが、それは人選とそれから育成に時間をかけると、ボランティアがボランティアを育てる。そうした取組ができるのではないかと思いました。そうした長期的なプログラムをこれから必要としていくのではないかと思います。
また、昔こちらで何回かワークショップなども実施させていただきましたが、その時は大学生をボランティアに使いました。その時には、どのような視点でどういう動きをしたらいいかを明確にし、その子たちに任せることを主に実施したところ、参加した方の興奮度と大学生の学びがものすごく大きく、その大学生たちの中には将来アートに関わる仕事に就きたいという思いをもった人材もいましたので、参加することへの喜びや体験を少し大事にした、展覧会とリンクする内容を考えてもいいのではないかと思いました。
資料に「歴史ある五稜郭公園に隣接している利点を活かしながら、ホスピタリティにあふれた質の高い時間と空間を提供できるよう、館内外の環境整備に努める」と書かれていますが、これはハード面、ソフト面があると思いますが、例えば、令和３年に購入している江差屏風は、素晴らしい地元の宝

であると思います。江差屏風や松前、五稜郭という歴史をリンクするような、街の中を観光客を含めて動かすという取組を、今年度ではなくても、これから先考えた方がいいのではないかと思いました。

委　　員：　私が活動しているのは音楽分野ですが、集客面で、やはり若者層が生のコンサートを聴きに行くということがない。デジタル社会になって、インターネットとか YouTube で十分となっている。自分たちがそれを見れば、その音楽を知れると思われていると思いますが、そうではなく、生の良さ、生の音楽の体験をすること、体感することということ。おそらく美術などの生の原画を見る魅力に対する感覚がないのではないかと考えています。コンサートにおいてもないのが現状です。

ジャンルを問わず、地域や世代に対するアプローチをすることが課題と感じました。魅力を見てもらうため、また、聴いていただくために、お客様に寄せすぎるというのもまた違うことになってしまうと思いますが、良いものをどうアプローチしていくかは、私にとっての課題だと思いながら伺っていました。

委　　員：　色々なジャンルに取り組まれている内容を拝見し、素晴らしいと思って伺っていました。ただ、皆さんのおっしゃった高校生のことに関し、私も思ったことがございましたので、お話しさせていただきます。

例えば、高校生の来館者数の課題を解決しようとしたら、どのような形で来てもらいたいのか。有料であるのか、あるいは来てもらう経験をする人を増やしていくのかによって、行動やプランが変わってくると思います。足を運んでもらうことであれば、私自身が開催している講座や図書会の参加者から、「この間、韓国のソウルに行ったら、色々な美術館があり、すごく面白いので全部観てきたが、どこの美術館も若者で溢れていた。どうしてだろうと調べたら、24 歳以下は無料だった。」ということを聞き、私もインターネットで調べたら、高校生に限らず 24 歳以下が無料でしたので、ソウルの若者たちは、アートに触れるということが、ライフスタイルの一部になっていて、頻繁に足を運んでいるということを聞きました。なかなか難しいかもしれませんが、今は、夏休み期間ですとか、常設展割引とかされていますが、例えば、高校生に特化し、トライアル的に特別展も年間無料などということができたら、何か変わるかもしれない。それを高校生の方々にポスターなどで、放課後チルタイムみたいな感じで、「アートの中で、空間でぼんやりしよう」とか、サードプレイス的に、「ちょっとアートを見て、少し静かなチルタイムを持ちましょう」とか、あるいはシールを使って「アートログ、アート活動をやりました」のように、芸活やアー活みたいなことを推奨する。または、「来てくれた高校生に限り、先着 1,000 名にクリアファイルを配ります」という感じで、とりあえず来てもらう。あるいは、今展示の什器が老朽化されているという課題もありましたが、そうした「修復のプロジェクトを高校生と一緒に

やっていく」などを考えてみたり、「アートフレンズみたいな人を 1,000 人募集します」という感じで、その人たちにシールやクリアファイルを配り、１年間フリーにするというように、売上を作るということであれば、全く見当違いですが、無料ということが可能であれば、色々なことも考えられるのではないかと考えてみました。

委　　員：　今年度の「和歌山静子の絵本原画展」について、私は図書室も担当しており、絵本も扱っていますので、そのチラシを置き、和歌山静子さんのコーナーを作り、「函館美術館でこういう展覧会を開催していますのでどうぞ」ということをやろうと思っていました。

こうした企画展であれば、図書室との連携という部分もできるのではないか思い、親子の方々がそのチラシを持って、函館に行った時に見てみようっていう風にしてもらえたらいいと思っていましたので、私も頑張って企画していけたらと思いました。

委　　員：　全体的な活動への感想ですが、総勢 14 名でこれだけの活動をするのは、色々なことをやりくりされているのではないか。前職では、学内に博物館があったので、そうしたことも含めて考えると、本当に頑張っておられるなという感想をもっています。老朽化してくると、どうしても建物などの維持が難しかったです。あとは、函館市に美術館があるということに、ある意味、慣れてしまっているところに、どのように企画を持ち込んでいくのかも、非常に検討されていると感じています。

基本的運営方針の「A」から「F」までは、私見ですと、特に「A　優れた作品の収集と適切な保管」と「D　活動の基礎となる調査・研究の推進」と「F　安全で快適な滞在時間の提供」が基礎になるのではないかと感じています。そうしたことが安定していると、他の項目の「B　多彩で特色ある展示活動の充実」「C　学習の場と情報提供の充実」「E　多様な主体との連携・協力による地域の活力向上」に、今までよりも工夫ができる。例えば、他からの企画等を学芸の方も安心して引き受けることができることに繋がります。学芸の方も、色々な研究があり、余裕があってこその企画ということもありますし、そうしたところに優先順位をつけるとしたら、分担して、そこに総務的な力も工夫していかなければいけない。多分、今までよりも潤沢にリソースが割かれることはありませんから、どのようにやりくりしていくかというところは、総務の方の知恵と両輪となっていると思いますので、美術館の中でも今一度、話す機会があると、少しずつでも進んでいけるのではないか思いました。

そこがないとできませんが、高校生の来館を増やそうということですが、私も大学に勤めており、大学生が一番メインで関わっていますが、高校生や高校生から大学生になりたての人と接しています。美術館などの調査についてアンケートを取ると、高校に入っていきなり自分で選んで行くというより

は、やはり、幼児から中学校ぐらいまでにどのように体験したか、分からないけど行った経験があるとかが非常に関わっているということが、明らかになっています。高校生だけでもなく、若年層の時に、いかに子どもを連れて行ってみようという場所にするかというのは大きい。それがあると、例えば、高校生は以前にもここで申し上げましたが、かなり忙しく、美術館の開館時間の中で足を運ぶのは難しい。大学生も同様だと思いますが、昨今の大学生は忙しいので、授業や課題以外のところで、開館時間内に来るのは難しいと思っています。

ソウルとかも 18 時以降の開館は無料であったりするところもあります。21 時、22 時まで開館しているので、仕事帰りの人や放課後の利用が多い。利用時間を延ばすのは単純な話ではありませんが、青森も少し週末に長い時間があったり、公立美術館もそうしたことをされているところがありますので、そこを何とかすると道が見えるのではないかと思いました。

委　　員：　学校の立場から話させていただきますが、小学生が進んで美術館へ行こうはなかなかならないのではないか。そこは、今、お話しされたように、保護者が一緒に連れてくるのではないかと思います。今も実施しているとは思いますが、今の小学校、中学校は、保護者に対して、チラシとかをメール配信で送付しています。直接、保護者の端末の方に流れているので、そこで宣伝をして、保護者の方が興味をもつと、「ちょっと一緒に行ってみようか」という話になり、その小さい時に一緒に行った経験が、中学、高校、大学生の時に、また行ってみようかとなるというお話を聞き、まさにそうだと思いました。

私自身もそうでした。私には娘がいますが、色々なところに行くと美術館にも行きます。そう考えると、やはり幼少期に函館美術館に連れてきていたからかなと思いながら話を聞いていました。

学校で、「こういった展覧会をやる」と宣伝していくと、もしかしたら保護者が一緒に子どもを連れてきて、そこから美術館を知って、来てもらえるということになると思いました。

また、高校生の話がたくさん出ていましたが、うちにも高校生がいるので、どうしたら来るのか生の声を聞いてみたいと思います。